

上須恵村は立花実山の知行地だった

古文書を読む(1)

「ドイツ出身のミヒエルです」というメールが突然舞い込んできたのは、昨年十二月のことでした。ミヒエルさんは九州大学で医学史関係の研究をしておられて、須恵町の眼科医・目薬などに関心を持つようになったのです。

そして翌日、寒さに震えながら役場の前を歩いていたら私に、教育委員会の山下さんが車の窓を開けて声をかけてきました。助手席には見慣れない人が座っていました。それがなんと当のミヒエルさんでした。

それにしてもミヒエルさんの情熱と行動力には驚かされます。雪の舞う中を、地理不案内のまま、早速、血山の歴史民俗資料館まで訪ねて来られたということでした。

さて、ここに掲げた古文書は、ミヒエルさんと教育委員会の山下啓之さんの、須恵町での調査の成果です。上須恵の田原幸佑さんのお宅で発見されたものです。

なお、元は一枚の紙を横長になるように二つ折りし、折り目で切断した「切紙(きりがみ)」ですが、現在は戦前に表装された形で伝えられています。

次のように、読むことができます。

(書き下し)

われら知行所、上須恵村、

麦作損毛につき、百姓ども

難儀の由候ところ、そなたより

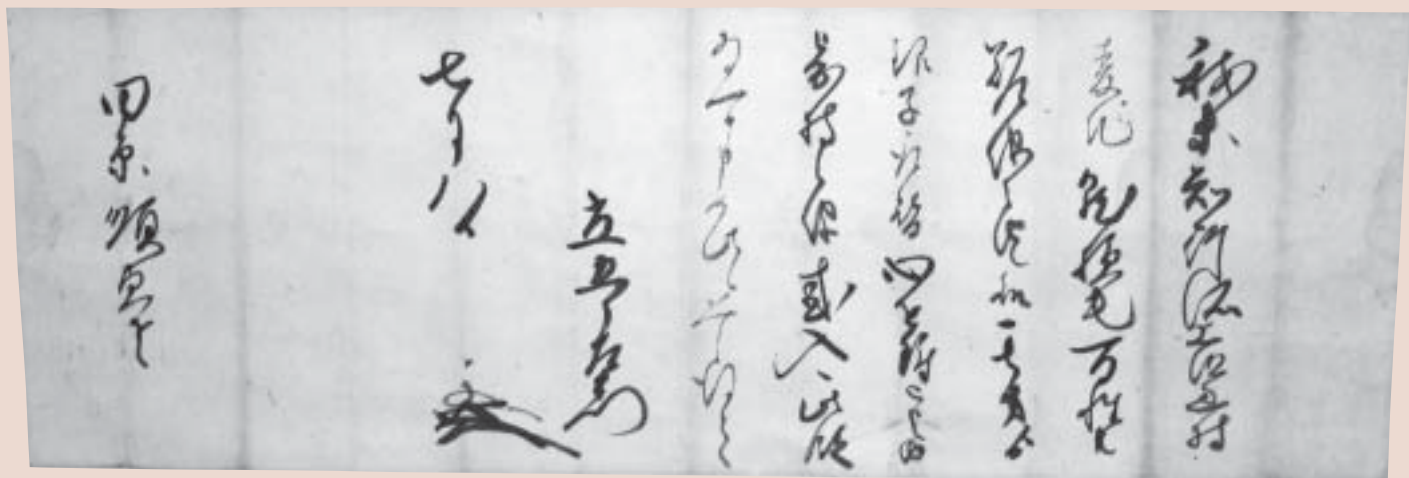
銀子取り替え、心をつけ申され候よし。

寄特の儀、感じ入り候。この段、

申すべきため、かくの如く候。恐々謹言。

多少想像を交えながら解釈すると、この年、麦の収穫ができなかった(損毛)ので、百姓たちは年貢を納められず困っていたのでしょう。そこに田原順貞さんが資金を提供して、無事年貢を納めることができた。その年貢を納める相手が立五郎左衛門だったわけですが、そうした事情が後から明らかになり、百姓を助けたその行いが感心だとして、一種の表彰状を出したのです。「恐々謹言」は、今日でも使われる「敬具」と同じように、文章を締めくくる際の決まり文句です。

宛名の田原順貞は田原眼科系図(『須恵町誌』九九九頁)では田原家の第二代で、宝永四年(一七〇七)に亡くなっています。初め弥吉貞勝と言っていたのが、眼科医となって順貞と称したのです。宛名の書き方が、順貞様でも順貞殿でもなく、順貞老と呼ばれているところに、五郎左衛門と順貞の親密な付き合いが浮かび上がってきます。田原家では、「老」は医者に対する



我等知行所上須恵村
麦作就損毛百姓共
難儀之由候処其方より
銀子取替心を附被申候由
寄特之儀感入候此段
為可申如此候恐々謹言
立五郎左衛門
七月八日
田原順貞老
(花押)

敬称だと聞いておられるとのこと。いずれにせよ、昔は「〃老」とか「〃翁」は人間性に対する敬称で、必ずしも老人を意味しないことは注意しておきたいと思っています。

差出人立五郎左衛門とは誰か。これは福岡藩最大の文化人と言われた立花五郎左衛門重根(しげもと)です。立花家は福岡藩家老の家柄でしたが、重根(歴史上は実山という名前で知られています)が御家騒動に巻き込まれて殺害され、断絶しました。実山の死は宝永五年ですから、この文書は宝永四年以前のものということになります。

これまで上須恵村が立花家の知行地であることは知られていませんでしたので、それがわかっただけでも収穫ですが、しかも、この文書に署名しているのが立花実山となると、この古文書自体にも大きな価値があります。

(次回に続く)